

開港で発展した横浜史冊子に

造物の多くを失った。神奈川台場の石積みのような遺構を活用すれば、横浜の歴史を今に伝える宝物になる」と話している。

江戸幕府が横浜開港翌年の1860年、横浜の海岸部を埋め立てて建設した「神奈川台場」。その歴史を通して横浜の歴史を振り返る冊子「神奈川台場物語」Ⅱ写真Ⅱを、横浜の経営者や有識者らで作る「神奈川台場地域活性化推進協会」が製作した。開港を機に発展した郷土史の資料として、地域の小学校に寄贈する。【山本明彦】

「神奈川台場」は、横浜の防衛、外国船に対し祝砲や礼砲を撃つ拠点として、現在の神奈川区星野町周辺に建設された。勝海舟が設計し、建設や警備は四国・松山藩が担当。広さはサッカー場3面分の約2秒に及んだとされる。現在は一帯が埋め立てられ、JR貨物の線路や公園に姿を変えたが、一部で石垣が露出している。

地域の小6生に寄贈

1899年の廃止後は忘れ去られた神奈川台場だったが、近年の発掘で、石垣が埋没したまま残っていることが分かった。これを受けて地元住民らが2013年、同協会を設立。台場の保存や史跡としての活用を訴える中で、明治維新150周年を記念して台場を紹介する冊子を製作することを思い立った。

川武臣館長が執筆・監修。台場を建設する経緯を通して、幕末から明治に至る横浜の歴史を説明したほか、周辺の史跡を巡るための散策マップも掲載している。同協会の理事長を務める横浜市中区の会社社長、山本博士さん(49)が国内外で集めた横浜の古写真や古地図、開港資料館の資料をふんだんに掲載し、当時の横浜のイメージが膨らむよう工夫した。

A4判32ページ。1万部製作し、神奈川区、西区、中区の公立小学校6年生に今後3年間、無料で配布する。山本さんは「横浜は関東大震災や戦時中の空襲、



「神奈川台場」の歴史に光